

〔原著〕

過去の関係性攻撃加害経験・被害経験の 長期的影響の検討

一回顧的方法による検証—

筑波大学大学院人間総合科学研究科：中田 千絵
筑波大学大学院人間総合科学研究科（心理学系）：濱口 佳和

The Examination of the Long Term Effects of Relational
Aggression and Victimization in the Past:
By Means of Retrospective Methods

Chie Nakada and Yoshikazu Hamaguchi

問題と目的

学校における深刻な問題の一つに、いじめ (bullying) がある。文部科学省は、いじめを「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより精神的な苦痛を感じているもの」と定義している (文部科学省, 2007)。また、文部科学省 (2009) の調査によると、全国の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校におけるいじめの認知件数は、全国で8万件を超えることが示されており、いじめの認知件数は相当数にのぼることがうかがえる。さらに、認知件数の学年別推移を概観すると、小学校5年生から中学校2年生にかけて子どもたちはいじめを多く経験していることがうかがえ、いじめの経験について考える際、この時期のいじめの経験に着目する必要がある。

また、いじめには様々な形態がある。その中でも、小学生・中学生では、「悪口・からかい」、「無視・仲間はずれ」といった形態のいじめが多いこと (森田・滝・秦・星野・若井, 1999) や、暴力的行為を受けるよりも、仲間はずれのほうが精神的に苦痛であることが示されている (松原, 1998)。こうしたことから、数あるいじ

めの形態の中でも、仲間はずれのような形態のいじめに着目する必要がある。

以上を踏まえ、本研究では関係性攻撃 (relational aggression) に着目する。関係性攻撃とは、「仲間関係を操作することによって相手に危害を加えることを意図した攻撃行動 (Crick & Grotpeter, 1995)」と定義されている。先行研究では、加害者には抑うつや孤独感の高さ (Crick et al., 1995)、不安や引っ込み思案行動との関連 (磯部, 2002)、反社会性パーソナリティ障害傾向や摂食障害傾向との関連 (Werner & Crick, 1999) が、被害者には仲間からの拒否との関連 (Crick & Bigbee, 1998)、孤独感の高さ (Crick et al., 1998; 畠山・山崎, 2006; Storch & Masia-Warner, 2004) が見られることなどが示されている。

関係性攻撃に関する先行研究は多数あるが、先行研究の問題点として3点あげられる。1点目は、過去の関係性攻撃加害経験・被害経験の長期的影響が検討されていない点である。いじめの長期的影響を示した研究は多数存在し (e.g., 坂西, 1995; 香取, 1999; Klomek, Sourander, Kumpulainen, Piha, Tamminen, Moilanen, Almqvist & Gould, 2008)、その長期的影響はいじめの形態によっても異なることが示唆されて

いる（藤城・濱口，2010；関根・濱口，2009）。こうしたことから、どのようないじめの形態を経験したかによって影響は異なることが推察されるが、いじめの形態を関係性攻撃に限定した検討はほとんど行われていない。関係性攻撃に限定した検討を行うことで、いじめの中でも特に関係性攻撃の経験に対して特徴的な影響や、その影響に対する介入方法についての示唆を得ることができると考えられる。そこで、本研究では、大学生を対象に、過去の関係性攻撃加害経験・被害経験の長期的影響の検討を行う。

問題点の2点目は、過去の関係性攻撃の経験が、対人関係のトラブルを引き起こす可能性のある要因に与える影響が検討されていない点である。先行研究では、関係性攻撃と抑うつや孤独感、社会不安といった個人内要因との関連の検討が中心であった（e.g., Crick et al., 1995; Storch et al., 2004）。しかし、関係性攻撃は対人関係の中で生じる問題であるため、関係性攻撃の経験と、対人関係におけるトラブルを引き起こす原因となる可能性のある要因との関連が見られる可能性がある。

本研究では、対人関係におけるトラブルを引き起こす原因となる可能性のある要因として、境界性パーソナリティ障害傾向（borderline personality features；以下BPD傾向）を扱う。DSM-IV-TRによると、境界性パーソナリティ障害（borderline personality disorder）とは、対人関係、自己像、感情の不安定および著しい衝動性の広範な様式で、成人期早期までに始まるパーソナリティ障害とされる。なお、ここで言うBPD傾向とは、境界性パーソナリティ障害と診断される病理群ではなく、健常群の中で相対的に境界性得点が高い群のことをさす。

Grotper & Crick (1996) は、関係性攻撃が生じる友人関係の特徴は、親密性と排他性であるとしている。また、関係性攻撃加害と被害の相関も高いことが示されている（e.g., Crick et al., 1998; Yeung & Lebdeter, 2007）。こうしたことから、関係性攻撃の加害者・被害者双方で、不安定な人間関係の形成が習慣化し、その結果、不安定な人間関係に特徴づけられるような

一定のパーソナリティが形成されている可能性もある。

また、大学生を対象とした先行研究において、関係性攻撃とBPD傾向との関連が見いだされている（Schmeelk, Sylvers & Lilienfeld, 2008; Werner et al., 1999）が、関係性攻撃加害には安定性が見られる（Crick, 1996；磯部, 2002）ことを考えると、こうした結果は、幼いころから関係性攻撃を繰り返し行った結果として、一定のパーソナリティ障害傾向が形成されている可能性を示唆するものであると考えられる。そのため、過去の関係性攻撃加害経験も、BPD傾向に影響を与えている可能性がある。また、BPD傾向は、生得的な要因のみならず、後天的な心的外傷体験によっても生じることが明らかになっている（井沢, 1995）。加えて、立花（1990）は、精神障害の発病の契機や症状の形成に「いじめられ体験」が強く影響していると考えられる事例の検討を行い、いじめ被害を経験することで幻覚・妄想、引きこもり、腹痛や頭痛などの身体症状といった問題が生じる場合があることを示唆している。以上より、過去の関係性攻撃被害経験も心的外傷体験ととらえることが可能であり、そうした心的外傷体験がBPD傾向を形成する要因となっている可能性がある。そこで、本研究では、過去の関係性攻撃加害経験・被害経験が、大学生のBPD傾向に与える影響を検討する。

問題点の3点目は、過去の関係性攻撃の経験がポジティブな特性を損なう影響について明らかにされていない点である。いじめの長期的影響にはポジティブな影響も見られることが明らかになっているが（坂西, 1995；香取, 1999）、そうした影響が過去のいじめの経験に関係性攻撃経験に限定した場合にも生じるのかどうかという点については明らかにされていない。また、関係性攻撃を経験することでポジティブな特性はどのような影響を受けるのかという観点から検討を行うことで、より詳細な関係性攻撃の長期的影響の検討が可能になると考えられる。そこで、本研究では、対人関係上重要となると考えられるポジティブな特性として思いや

り (sympathy) に着目する。

思いやりは周囲との関係があって育つものという指摘があり (巖谷, 2003), また, 中学生において充実した仲間関係が思いやり行動の形成に影響することが示されている (津山・森下, 2000)。しかし, 関係性攻撃は思いやりが育まれる仲間関係の中で起こる問題であるため, 関係性攻撃の経験により思いやりがうまく育まれていないといったような影響が見られる可能性がある。

なお, 思いやりと類似した概念に共感 (empathy) がある。内田・北山 (2001) は, 思いやりに含まれる心理傾向として, 『向社会的行動の動機づけ』, 『共感能力』, 『相手の気持ちの直感的理解』の3つを挙げ, 共感には『相手の気持ちの直感的理解』が含まれていないことを指摘している。本研究では, より多面的なポジティブな心理傾向を扱うことで, 過去の関係性攻撃加害経験・被害経験がポジティブな特性に与える影響を包括的に検討するため, 共感ではなく思いやりに着目する。

以上より本研究では, 思いやりを内田ら (2001) に則り, 『『他者の気持ちを察し, その人の立場に立って考えること』, そのうえで『その人の気持ちや状態に共感もしくは同情すること』, そして『向社会的行動の動機づけとなる』』心理傾向と定義し, 過去の関係性攻撃加害経験・被害経験が大学生の思いやりにも及ぼす影響を検討する。

本研究の目的

本研究の目的は, 過去 (小学校5年生から中学校2年生時) の関係性攻撃加害経験・被害経験が, 大学生の BPD 傾向と思いやりにも及ぼす影響を検討することである。その際, 関係性攻撃加害経験・被害経験の影響をより明確にするために, 過去の身体的攻撃加害経験・被害経験および過去の言語的攻撃加害経験・被害経験を統制した上で検討を行う。

仮説

仮説 1 過去の関係性攻撃加害経験について

1-1 過去の関係性攻撃加害経験は, BPD 傾向を強める。

1-2 過去の関係性攻撃加害経験は, 思いやりを弱める。

仮説 2 過去の関係性攻撃被害経験について

2-1 過去の関係性攻撃被害経験は, BPD 傾向を強める。

2-2 過去の関係性攻撃被害経験は, 思いやりを強める。

また, 過去の関係性攻撃加害と被害両方の経験の影響については明らかになっていない点が多い。そのため, 本研究では, 過去の関係性攻撃加害と被害両方の経験が BPD 傾向と思いやりにも及ぼす交互作用的な影響については, 具体的に仮説を設定せず, 探索的に検討していく。

方法

調査対象者 関東地方の大学に通う大学生・大学院生289名のうち, 回答に不備がなかった282名 (男性121名, 女性161名, 平均年齢20.36歳, SD = 1.40) を対象とした。

調査時期 2009年9月中旬から11月中旬

調査内容

(1) フェイスシート

所属, 学年, 年齢, 性別の回答を求めた。

(2) 過去の関係性攻撃経験尺度

櫻井 (未公刊) で作成された関係性攻撃尺度をもとに, 藤城・濱口 (2010) で過去の関係性攻撃加害経験・被害経験を測定するよう修正された尺度を使用した。18項目, 5件法。

(3) 過去の身体的攻撃・言語的攻撃被害経験および向社会的行動を受けた経験尺度

Kawabata, Crick & Hamaguchi (2010) の「学校のなかまとおなたについてのアンケート」より, 身体的攻撃被害経験1項目, 言語的攻撃被害経験1項目, 向社会的行動を受けた経験3項目を抜粋し, 過去の経験を測定するよう教示・語句を修正して使用した。5件法。なお, 向社会的行動を受けた経験を測定する項目は, フィラー項目であった。

(4) 過去の身体的攻撃・言語的攻撃加害経験尺度

秦(1990)の「敵意的攻撃インベントリー」の「身体的暴力」と「言語的攻撃」の2つの因子から、因子負荷量の高い順に各2項目を抜粋し、過去の経験を測定するよう教示・語句を修正して使用した。5件法。

(5) ミロン臨床多軸目録Ⅱ境界性スケール短縮版(井沢・大野・浅井・小此木, 1995)

現在のBPD傾向を測定した。17項目, 2件法。

(6) 思いやり尺度(内田・北山, 2001)

現在の思いやりを測定した。22項目, 5件法。

(7) 信頼感尺度

フィルター項目として、信頼感尺度(天貝, 1995)のうち、「自分への信頼」(6項目)と「他人への信頼」(8項目)の2つの下位尺度を使用した。6件法。

手続き

大学の講義時間の前後もしくは個別に質問紙の配布・回収を行った。質問紙への回答は任意であり、個人が特定されないよう無記名で調査を実施した。

結 果

尺度構成

本研究において使用した尺度について、過去の関係性攻撃経験尺度については、もともっている過去の関係性攻撃経験尺度が高校生を対象として作成されたものであることから、大学生を対象とした場合の下位尺度の因子構造を確認したうえで、信頼性の確認を行うこととした。因子分析の結果は後述する。また、その他の尺度については、大学生を適用対象として含む尺度であるため、信頼性を内の一貫性の観点から確認するにとどめた。本研究におけるそれぞれの尺度の信頼性係数は、敵意的攻撃インベントリーの下位尺度の「身体的暴力」、「言語的攻撃」はそれぞれ $\alpha = .78$, $\alpha = .67$, ミロン臨床多軸目録Ⅱ-境界性スケール短縮版は $\alpha = .76$, 思いやり尺度は $\alpha = .81$ であった。なお、過去の身体的攻撃被害経験と過去の言語的攻撃被害経験に関しては、それぞれ1項目ずつであるた

め信頼性の確認を行わず、各項目の回答得点をそのまま過去の身体的攻撃被害経験得点および過去の言語的攻撃被害経験得点とした。

過去の関係性攻撃経験尺度の因子分析の結果

過去の関係性攻撃経験尺度18項目について、因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行った。その結果、固有値1以上の因子が2因子抽出された¹¹⁾。いずれの項目も、因子負荷量の絶対値が.40以上であることが確認された。第1因子は「友だちと話している時に、嫌いな子がきたら急にだまってこそこそと話をした」などの項目に高い因子負荷量を示し、原尺度の「関係性攻撃被害経験」にあたる因子であった。第2因子は、「私は、友だちから仲間はずれにされていると思うことがあった」などの項目に高い因子負荷量を示し、原尺度の「関係性攻撃被害経験」にあたる因子であった。以上より、大学生を対象としても原尺度と同じ因子構造となることが確認された。また、下位尺度ごとに信頼性係数を算出した結果、第1因子が $\alpha = .91$, 第2因子が $\alpha = .92$ となり、ともに高い信頼性が確認された。この結果にもとづき、各下位尺度の回答得点の平均値を、それぞれ過去の関係性攻撃被害経験得点、過去の関係性攻撃被害経験得点とした。

性差の検討

各尺度における性差を検討するため、*t*検定を行った。結果をTable 1に示す。分析の結果、過去の身体的攻撃被害経験、過去の身体的攻撃被害経験、過去の言語的攻撃被害経験は男性が女性よりも高く、過去の関係性攻撃被害経験、思いやりは女性が男性よりも高かった。また、過去の関係性攻撃被害経験、過去の言語的攻撃被害経験、BPD傾向については、性差は見られなかった。上記の結果の通り、多くの尺度で男女差が見られるため、以降の分析は男女別で実

¹¹⁾ 藤城・濱口(2010)が未公表のため、項目および因子負荷量の記載は避けた。詳細についての問い合わせは、下記に連絡のこと。

c-nakada@human.tsukuba.ac.jp

施した。

各下位尺度間の相関係数

各尺度間の関連を検討するため、相関係数を算出した。結果を Table 2 に示し、過去の関係性攻撃加害経験・被害経験に関する結果をまとめる。

男性において、過去の関係性攻撃加害経験と、過去の関係性攻撃被害経験、過去の身体的攻撃加害経験との間に中程度の正の相関がみられ、過去の身体的攻撃被害経験、過去の言語的攻撃加害経験、過去の言語的攻撃被害経験、現在の BPD 傾向との間に低い正の相関がみられた。加えて、過去の関係性攻撃加害経験と現在の思いやりとの間に低い負の相関がみられた。また、過去の関係性攻撃被害経験と、過去の身体的攻撃被害経験、過去の言語的攻撃被害経験

との間に低い正の相関がみられた。

女性において、過去の関係性攻撃加害経験と、過去の関係性攻撃被害経験との間に中程度の正の相関がみられ、過去の言語的攻撃加害経験、過去の言語的攻撃被害経験、現在の BPD 傾向との間に低い正の相関がみられた。また、過去の関係性攻撃被害経験と、過去の身体的攻撃被害経験、過去の言語的攻撃被害経験、現在の BPD 傾向との間に低い正の相関がみられた。

過去の関係性攻撃加害経験・被害経験の長期的影響の検討

過去の関係性攻撃加害経験・被害経験の長期的影響を検討するため、男女別に強制投入法による階層的重回帰分析を行った。投入した変数は、ステップ 1 で統制変数である過去の身体的攻撃加害経験・被害経験、過去の言語的攻撃加

Table 1 各尺度の平均値と性差

	男性 平均値 (SD)	女性 平均値 (SD)	性差 <i>t</i> (<i>df</i>), <i>p</i>
過去の関係性攻撃経験尺度			
関係性攻撃加害経験 (得点範囲1~5)	2.07 (0.79)	2.15 (0.84)	0.87 (278), <i>n.s.</i>
関係性攻撃被害経験 (得点範囲1~5)	2.36 (0.85)	2.59 (0.99)	2.06 (275), <i>p</i> < .05
身体的攻撃加害経験 (得点範囲1~5)	2.18 (1.17)	1.44 (0.90)	5.78 (217), <i>p</i> < .001
身体的攻撃被害経験 (得点範囲1~5)	2.03 (1.02)	1.32 (0.67)	6.64 (194), <i>p</i> < .001
言語的攻撃加害経験 (得点範囲1~5)	2.55 (1.10)	2.49 (1.18)	0.45 (280), <i>n.s.</i>
言語的攻撃被害経験 (得点範囲1~5)	2.36 (1.03)	1.83 (0.92)	4.56 (280), <i>p</i> < .001
BPD 傾向 (得点範囲1~17)	3.55 (2.68)	3.48 (3.15)	0.19 (278), <i>n.s.</i>
思いやり尺度 (得点範囲1~5)	3.14 (0.45)	3.54 (0.46)	7.10 (273), <i>p</i> < .001

Table 2 本研究で使用了りた尺度間相関係数

	関係性攻撃 加害経験	関係性攻撃 被害経験	身体的攻撃 加害経験	身体的攻撃 被害経験	言語的攻撃 加害経験	言語的攻撃 被害経験	BPD 傾向	思いやり
関係性攻撃加害経験		.41***	.40***	.24**	.28**	.26**	.21*	-.23*
関係性攻撃被害経験	.51***		.05	.21*	-.07	.34***	.16†	-.05
身体的攻撃加害経験	.18*	.16*		.29**	.43***	.17†	.12	-.19*
身体的攻撃被害経験	.16*	.21**	.29***		.15	.51***	.07	-.02
言語的攻撃加害経験	.20*	.12	.40***	.23**		.18*	.18*	-.17†
言語的攻撃被害経験	.24**	.27**	.28***	.43***	.20**		.18*	-.12
BPD 傾向	.28***	.34***	.20*	.27**	.10	.17*		-.20*
思いやり	-.08	-.04	.01	-.13	-.07	-.12	-.13†	

† *p* < .10, * *p* < .05, ** *p* < .01, *** *p* < .001

斜線の上が男性、下が女性の相関を示す。

害経験・被害経験，ステップ2で過去の関係性攻撃加害経験・被害経験，ステップ3で交互作用項として過去の関係性攻撃加害経験と被害経験の積であった。目的変数は，現在のBPD傾向および思いやりであった。さらに，過去の関係性攻撃加害経験と過去の関係性攻撃被害経験の交互作用が有意もしくは有意傾向であった場合は，その検討を行った。Cohen & Cohen (1983) の手続きを踏まえ，BPD傾向および思いやりを目的変数とする回帰方程式に，過去の身体的攻撃加害経験，過去の身体的攻撃被害経験，過去の言語的攻撃加害経験，過去の言語的攻撃被害経験それぞれの平均得点とそれぞれの偏回帰係数の積，過去の関係性攻撃加害経験および過去の関係性攻撃被害経験の平均得点±1標準偏差の値をそれぞれ代入した。その後，得られた値にもとづいてグラフを作成し，交互作用の検討を行った。

まず，男性の結果について述べる。現在のBPD傾向を目的変数として分析を行った結果，ステップ1，ステップ2，ステップ3のいずれの R^2 変化量も有意ではなく，統制変数，関係性攻撃加害経験・被害経験，交互作用のすべてで有意な関連は見られなかった。すなわち，男性において，過去の身体的攻撃加害経験・被害経験，過去の言語的攻撃加害経験・被害経験，過去の関係性攻撃加害経験・被害経験は，現在の

BPD傾向を予測しないことがわかった。また，思いやりを目的変数として分析を行った結果，ステップ1，ステップ2，ステップ3のいずれにおいても R^2 変化量が有意傾向となり，ステップ1では，身体的攻撃被害経験が，ステップ2では，関係性攻撃被害経験がそれぞれ有意な負の関連を示した。また，ステップ3の交互作用が有意傾向であったため検討を行った結果，関係性攻撃加害経験が高い男性のうち，関係性攻撃被害経験が低い男性は思いやりが低く，関係性攻撃被害経験が高い男性は思いやりが高かった。この結果を Table 3 および Figure 1 に示す。

次に女性の結果を述べる。BPD傾向を目的変数とした分析の結果，ステップ1，ステップ2の R^2 変化量が有意となり，ステップ1では，身体的攻撃被害経験が，ステップ2では関係性攻撃被害経験がそれぞれ有意な正の関連を示した。ステップ3の交互作用は有意ではなかった。すなわち，女性において，過去の身体的攻撃被害経験と過去の関係性攻撃被害経験は，現在のBPD傾向の高さを予測することがわかった。この結果を Table 4 に示す。また，思いやりを目的変数として分析を行った結果，ステップ1，ステップ2の R^2 変化量が有意となり，ステップ1では言語的攻撃加害経験が有意な正の関連を示した。また，ステップ2では関係性攻

Table 3 思いやりを目的変数とした時の階層的重回帰分析の結果（男性）

	β (ステップ1)	β (ステップ2)	β (ステップ3)	R^2	R^2 変化量	F値
(ステップ1)				.04	.07†	2.28†
身体的攻撃加害経験	-.17†	-.16	-.15			
身体的攻撃被害経験	.23*	.25*	.25*			
言語的攻撃加害経験	-.10	-.12	-.14			
言語的攻撃被害経験	-.09	-.02	-.01			
(ステップ2)				.07	.04†	2.46*
関係性攻撃加害経験		-.02	-.04			
関係性攻撃被害経験		-.21*	-.22*			
(ステップ3)				.09	.04†	2.60*
関係性攻撃加害経験 × 関係性攻撃被害経験			.16†			

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$
注) F値は重回帰式全体の有意性検定の値を示す。

撃被害経験が有意な負の関連を示した。ステップ3の交互作用は有意ではなかった。すなわち、過去の言語的攻撃加害経験は現在の思いやりの高さを予測し、過去の関係性攻撃被害経験は現在の思いやりの低さを予測することがわかった。この結果を Table 5 に示す。

考 察

過去の関係性攻撃加害経験・被害経験の性差

本研究では、過去の関係性攻撃加害経験において性差は見られなかった。従来、関係性攻撃加害は女子に多くみられるとされており (Crick et al., 1995), 本研究の結果は、北米における従来の知見と異なる結果である。一方、日

本における先行研究では、関係性攻撃加害には性差は見られないとする知見があり (磯部・菱沼, 2007; 坂井・山崎, 2003; 2004), さらに、過去の関係性攻撃加害経験について調査を行った藤城ら (2010) においても、性差は見られなかった。これより、日本における関係性攻撃加害については、関係性攻撃を行っている時点であっても、過去の経験であっても、性差は見られない可能性が推察される。こうした結果は、北米と日本の文化差によるものだと考えられる。日本文化は北米と比較して集団主義的であることが指摘されており (Markus & Kitayama, 1991) 日本においては男女問わず、集団に加われないことが否定的に捉えられる可能性がある。そのため、無視や仲間はずれといった人間関係に対する攻撃である関係性攻撃が性別に関わらず効果的な攻撃であると認識されているため、性別を問わず関係性攻撃が実行されやすいという理由により、日本における関係性攻撃加害には性差が見られない可能性がある。

一方、過去の関係性攻撃被害経験については性差が見られ、男性よりも女性が過去に多く被害を経験していたことが明らかになった。これは、過去に日本で行われた関係性攻撃被害を測定した先行研究のうち、藤城ら (2010) の結果と一致したが、畠山ら (2006) や Kawabata et al. (2010) とは異なる結果であった。この違い

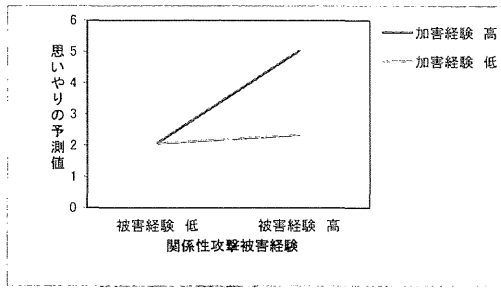


Figure 1 男性における過去の関係性攻撃加害と被害両方の経験の高低によって予測される思いやりの変化

Table 4 BPD 傾向を目的変数とした時の階層的重回帰分析の結果 (女性)

	β (ステップ1)	β (ステップ2)	β (ステップ3)	R^2	R^2 変化量	F 値
(ステップ1)				.06	.09**	3.67**
身体的攻撃加害経験	.13	.11	.12			
身体的攻撃被害経験	.21*	.19*	.16†			
言語的攻撃加害経験	-.02	-.04	-.04			
言語的攻撃被害経験	.04	-.03	-.04			
(ステップ2)				.15	.09***	5.46***
関係性攻撃加害経験		.13	.09			
関係性攻撃被害経験		.23**	.24**			
(ステップ3)				.15	.01	4.89***
関係性攻撃加害経験 × 関係性攻撃被害経験			.10			

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

注) F 値は重回帰式全体の有意性検定の値を示す。

Table 5 思いやりを目的変数とした時の階層的重回帰分析の結果（女性）

	β (ステップ1)	β (ステップ2)	β (ステップ3)	R^2	R^2 変化量	F値
(ステップ1)				.04	.07*	2.71*
身体的攻撃加害経験	-.11	-.10	-.10			
身体的攻撃被害経験	-.16†	-.13	-.12			
言語的攻撃加害経験	.16†	.17*	.16†			
言語的攻撃被害経験	-.08	-.03	-.02			
(ステップ2)				.11	.08**	4.18**
関係性攻撃加害経験		-.01	.01			
関係性攻撃被害経験		-.28**	-.29**			
(ステップ3)				.10	.00	3.60**
関係性攻撃加害経験 × 関係性攻撃被害経験			-.05			

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$
 注) F値は重回帰式全体の有意性検定の値を示す。

は、評定方法の違いによるものと考えられる。藤城ら（2010）では、回顧法を使用して自己評定により調査を行っていたのに対し、島山ら（2006）は、関係性攻撃被害を経験している時点で教師評定によって、Kawabata et al.（2010）は、関係性攻撃被害を経験している時点で自己評定によって、それぞれ測定を行っている。本研究では、藤城ら（2010）と同様に回顧法による自己評定で関係性攻撃被害経験を測定した。こうした結果は、関係性攻撃の被害が教師からは見えにくく教師評定では関係性攻撃被害の実態が捉えにくい可能性や、関係性攻撃の被害そのものに性差はないが、過去の関係性攻撃被害経験を想起した場合、男性よりも女性が関係性攻撃被害経験をネガティブな体験として捉えやすく、被害経験を想起しやすい可能性を示唆するものであると考えられる。

以上のように、関係性攻撃の性差に関しては、様々な知見がみられ、一貫した結果が得られているとは言い難い。関係性攻撃の性差については、さらなる検討が必要であろう。

過去の関係性攻撃加害経験の長期的影響

本研究の結果、過去の関係性攻撃加害経験は、男女ともに現在のBPD傾向および思いやりを予測せず、過去の関係性攻撃加害経験は、現在のBPD傾向および思いやりに影響を及ぼ

さないことが明らかになった。よって、仮説1-1「過去の関係性攻撃加害経験は、BPD傾向を強める」および仮説1-2「過去の関係性攻撃加害経験は、思いやりを弱める」は支持されなかった。

仮説が支持されなかった理由としては、過去の関係性攻撃加害経験の測定法の問題があげられる。本研究では、過去の関係性攻撃加害経験を、期間を限定した上で回顧的な方法を用いて測定した。先行研究において、関係性攻撃加害は幼児（e.g., Crick, Casas & Mosher, 1997；磯部, 2002）から大学生（e.g., Werner & Crick, 1999）まで、幅広い年代まで見られることや、安定性が見られること（Crick, 1996；磯部, 2002）がわかっており、小学校5年生から中学校2年生時の経験よりもさらに長い期間の関係性攻撃加害経験が影響している可能性、また、過去とはいえ関係性攻撃加害経験を自己報告することに抵抗があった可能性がある。そのため、今後は縦断的研究を実施するなど、さらなる検討が必要である。

過去の関係性攻撃被害経験を長期的影響

過去の関係性攻撃被害経験は、女性で現在のBPD傾向の高さを予測したが、男性では予測しなかった。すなわち、過去の関係性攻撃被害経験は、女性においてのみ現在のBPD傾向を

強めることが明らかになった。よって、仮説1-2「過去の関係性攻撃被害経験は、BPD傾向を強める」は部分的に支持された。

女性においてこうした結果が見られた理由は、女性が男性と比べて、過去の関係性攻撃被害経験をネガティブな外傷的体験として捉えやすいためだと考えられる。女性は、男性と比べて関係性を重視するといった指摘 (Block, 1983) や、女性の方が、無視や仲間はずれといった人間同士の関係を利用した攻撃被害経験に対する傷つきの程度が高いことが示されている (小田部・加藤, 2007)。こうしたことから、女性は過去の関係性攻撃被害経験をネガティブな外傷的体験ととらえやすく、関係性攻撃の被害を避けようとするあまり、関係性攻撃被害を想起させるような状況になると、友人関係を解消しようとしたり、逆に友人と過度に親密に接したりしてしまうような一貫性の欠けた不安定な行動をとりやすくなっていると考えられる。また、関係性攻撃の被害を受けることを避けるために、衝動的な行動をとりやすくなるなどしているとも考えられる。このような結果として、大学生になったときに、衝動性や友人関係の不安定さを特徴とする BPD 傾向が高まっていると考えられる。一方、男性は女性と比較して関係性を重視しないため、仲間集団から排除されるような関係性攻撃の被害経験がネガティブな外傷的体験となりにくく、BPD 傾向には影響を及ぼさなかったと推察される。

また、過去の関係性攻撃被害経験は、男女とも現在の思いやりの低さを予測した。すなわち、過去の関係性攻撃被害経験は、男女とも思いやりを弱めることが明らかになった。よって、仮説2-2「過去の関係性攻撃被害経験は、思いやりを強める」は支持されなかった。

先行研究より、関係性攻撃の被害を受けている小学生は、仲間から受容されにくく、向社会的行動を受けにくい (Kawabata et al., 2010) ことや、仲間から拒否されやすい (Crick et al., 1998; Cullerton-Sen et al., 2005) ことが明らかになっており、過去に関係性攻撃被害を経験したことで、周囲との友人関係がうまく築けず、

友人関係が希薄になった結果、思いやりが育まれなかった可能性がある。

過去の関係性攻撃加害と被害両方の経験の長期的影響

男女とも、BPD 傾向については、過去の関係性攻撃加害経験と被害経験の交互作用は有意ではなかった。

思いやりについては、過去の関係性攻撃加害経験と被害経験の交互作用が男性では有意傾向となったが、女性では有意ではなかった。交互作用の検討を行った結果、過去に関係性攻撃加害と被害両方の経験が多い男性は、思いやりが高まる可能性があることが明らかになった。

男性においては、関係性攻撃の加害と被害の両方を経験することで、関係性攻撃加害を行う立場と被害を受ける立場の両方から関係性攻撃という行為を客観的に見ることができるようになり、関係性攻撃を行ったり被害を受けたりすることを避けるため対人関係を良好に保っておこうとして、思いやりが高まると考えられる。また、藤城ら (2010) は、高校生男子において、中学生時に関係性攻撃の加害と被害両方の経験が多いと、友人と互いの個性を尊重する関係を望む欲求である相互尊重欲求が高まる傾向があることを明らかにしている。こうしたことから、男性においては、過去に関係性攻撃加害と被害の両方を経験することはポジティブな特性や心理傾向を高める可能性があることが示唆される。しかし、このような結果が見られる理由や、未検討である別のポジティブな要因についても同様の結果が見られるのかなど不明確な点が多く、今後さらなる検討が必要である。

男性にのみこうした結果が見られた理由は、関係性攻撃加害や被害に対する考え方が男女で異なるためであると考えられる。前述したように、女性は男性に比べて関係性を重視する傾向がある。そのため、女性にとっては、男性以上に関係性攻撃加害は効果的な攻撃となり、被害を受けることは大きな精神的負担となりやすくと考えられる。そして、両方を経験することは効果的な攻撃方法を学習する一方で大きな精神

的負担を抱えることとなり、関係性攻撃の加害と被害の両方を経験することで、関係性攻撃という行為を客観的に見ることができなくなると推察される。こうした、男女での関係性攻撃に対する考え方の違いにより、現在の思いやりに対する影響が異なったのではないかと推察される。

本研究の問題点および今後の課題

本研究の問題点としては、3点を挙げる事ができる。

1点目は、過去の関係性攻撃加害経験・被害経験を回顧法によって調査した点である。そのため、過去の関係性攻撃加害経験・被害経験について回答者が正確に思い出せていない可能性や、BPD傾向や思いやりの時系列的変化を正確にとらえられていない。こうした点を改善するため、今後は縦断研究を行っていく必要がある。

2点目は、現在の関係性攻撃加害・被害について調査を行っていない点である。先行研究(Schmeelk, et al., 2008; Werner et al. 1999)で示されているように、関係性攻撃加害・被害は大学生でも生じるものであり、さらに関係性攻撃加害には安定性が見られる(Crick, 1996; Crick et al., 2006; 磯部, 2002)ことを考慮すると、大学生になっても関係性攻撃加害・被害を経験している可能性があり、本研究の結果は、現在経験している関係性攻撃の影響である可能性を排除できない。今後は、現在の関係性攻撃加害・被害の影響を統制したうえで、過去の関係性攻撃加害経験・被害経験の長期的影響を検討していく必要がある。

3点目は、過去の関係性攻撃加害経験・被害経験とその影響とを媒介する要因が検討されていない点である。過去のいじめられた体験のマイナスの影響を低くし、プラスの影響を高くするには、「信頼感の回復」、「プラス思考」、「心の整理」が有効であることが示されており(香取, 1999)、こうしたことから、媒介要因の存在が示唆される。また、過去の関係性攻撃加害経験・被害経験を現在どのように認知してい

るかといった認知的要因や、意味づけ(meaning)といった概念との関連についても、今後検討していく必要がある。

引用文献

- 天貝由美子(1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.
- American Psychiatric Association (2000). Quick reference to the diagnostic criteria from DSM-IV-TR. 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸(訳)(2003). DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引 新訂版 医学書院.
- 坂西友秀(1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他者認知の差 社会心理学研究, 11, 105-115.
- Block, J.H. (1983). Differential premises arising from differential socialization of the sexes: Some conjectures. *Child Development*, 54, 1335-1354.
- Cohen, J. & Cohen, P. (1983). *Applied multiple regression/correlation analysis for the behavioral science. 2nd ed.* Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Crick, N.R. (1996). The role of overt aggression, relational aggression, and prosocial behavior in the prediction of children's future social adjustment. *Child Development*, 67, 2317-2327.
- Crick, N.R. & Bigbee, M.A. (1998). Relational and overt forms of peer victimization: A multiinformant approach. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, 66, 337-347.
- Cullerton-Sen, C. & Crick, N.R. (2005). Understanding the effects of physical and relational victimization: The utility of multiple perspectives in predicting social-emotional adjustment. *School Psychology Review*, 34, 147-160.
- Crick, N.R. & Grotpeter, J.K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722.
- 藤城達也・濱口佳和(2010). 高校生における過去の関係性攻撃経験と現在の友人関係との関

- 連の検討 - 友人に対する感情的側面・欲求の側面に着目して - 日本教育心理学会発表論文集, 52, 420.
- Grotzinger, J.K. & Crick, N.R. (1996). Relational aggression, overt aggression, and Friendship. *Child Development*, 67, 2328-2338.
- 秦一士 (1990). 敵意的攻撃インベントリーの作成. *心理学研究*, 61, 227-234.
- 畠山美穂・山崎晃 (2006). 幼児の関係性攻撃及び外顯的攻撃による被害と孤独感との関連. *パーソナリティ研究*, 14, 194-204.
- 巖岩奈々 (2003). 人間関係の中で育つ思いやり. *児童心理*, 57, 886-891.
- 磯部美良 (2002). 幼児の関係性攻撃と社会的スキルに関する短期縦断的研究. *広島大学大学院教育学研究科紀要*, 51, 249-255.
- 磯部美良・菱沼悠紀 (2007). 大学生における攻撃性と対人情報処理の関連 - 印象形成の観点から. *パーソナリティ研究*, 15, 290-300.
- 井沢功一朗 (1995). 境界性人格特性の高さに対する心的外傷体験の持続的効果の検討. *性格心理学研究*, 7, 88-98.
- 井沢功一朗・大野裕・浅井昌弘・小此木啓吾 (1995). ミロン臨床多軸目録- II 境界性スケール短縮版の構成とその妥当性・信頼性の検証. *季刊 精神科診断学*, 6, 473-483.
- 香取早苗 (1999). 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究. *カウンセリング研究*, 32, 1-13.
- Kawabata, Y., Crick, N.R. & Hamaguchi, Y. (2010). Forms of aggression, social-psychological adjustment, and peer victimization in a Japanese sample: The moderating role of positive and negative friendship quality. *Journal of Abnormal Psychology*, 38, 471-484.
- Klomek, A.B., Sourander, A., Kumpulainen, K., Piha, J., Tamminen, T., Moilanen, I., Almqvist, F. & Gould, M.S. (2008). Childhood bullying as a risk for later depression and suicidal ideation among Finnish males. *Journal of Affective Disorders*, 109, 47-55.
- Markus, H.R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 松原達哉 (1998). 普通の子がふるう暴力 - いじめ・暴力の心理と予防・指導法. 教育開発研究所.
- 文部科学省 (2007). 「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の見直しについて. 文部科学省ホームページ. 2007年11月7日 < http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/11/07110710/002.htm > (2009年10月26日).
- 文部科学省 (2010). 平成20年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」. 文部科学省ホームページ. 2009年11月30日 < http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/11/_icsFiles/afiedfile/2009/11/30/1287227_1_1.pdf > (2010年4月27日).
- 森田洋司・滝充・秦政春・星野周弘・若井彌一 (1999). 日本のいじめ: 予防・対応に生かすデータ集. 金子書房.
- 小田部貴子・加藤和生 (2007). いじめにおける間接的・直接的攻撃の性差: 攻撃被害と傷つき程度に注目して. *日本教育心理学会総会発表論文集*, 49, 350.
- 坂井明子・山崎勝之 (2003). 小学生における3タイプの攻撃性が抑うつと学校生活享受感情に及ぼす影響. *学校保健研究*, 45, 65-75.
- 坂井明子・山崎勝之 (2004). 小学生における3タイプの攻撃性が攻撃反応の評価および結果予期に及ぼす影響. *教育心理学研究*, 52, 298-309.
- 櫻井良子 (未公開). 中学生における関係性攻撃の特徴. 筑波大学心理学研究科中間論文.
- 関根千恵・濱口佳和 (2009). 過去の社会的攻撃被害経験が青年期後期における心理に及ぼす影響. *筑波大学発達臨床心理学研究*, 20, 59-70.
- Schmeelk, K.M., Sylvers, P., & Lilienfeld, S.O. (2008). Trait correlates of relational aggression in a nonclinical sample: DSM-IV personality disorders and psychopathy. *Journal of Personality Disorders*, 22, 269-283.
- Storch, E.A. & Masia-Warner, C. (2004). The role

- of peer victimization to social anxiety and loneliness in adolescent females. *Journal of Adolescence*, 27, 351-362.
- 立花正一 (1990). 「いじめられ体験」を契機に発症した精神障害について 精神神経学雑誌, 92, 321-342.
- 津山文子・森下正康 (2000). 中学生の仲間関係の経験と思いやり行動 日本教育心理学会総会発表論文集, 42, 654.
- 内田由紀子・北山忍 (2001). 思いやり尺度の作成と妥当性の検討 心理学研究, 72, 275-282.
- Werner, N.E. & Crick, N.R.(1999). Relational aggression and social-psychological adjustment in a college sample. *Journal of Abnormal Psychology*, 108, 615-623.
- Yeung, R.S. & Leadbeater, B.J. (2007). Does hostile attributional bias for relational provocations mediate the short-term association between relational victimization and aggression preadolescence? *Journal of Adolescence*, 36, 973-983.

付 記

本研究を実施するにあたり多岐にわたってご指導いただきました濱口佳和先生, また, 調査にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は, 日本教育心理学会第52回総会において発表された。